

百姓の夢

小川未明

青空文庫

あるところに、牛うしを持もっている百姓しやうがありました。その牛うしは、もう年としをとっていました。長い年ながとしの間、その百姓しやうのために重い荷おもにつけて働はたらいたのであります。そして、いまでも、なお働はたらいていたのであつたけれど、なんにしても、年としをとってしまったては、ちやうど人間にんげんと同じように、若い時わかじぶん分はたらほど働はたらくことはできなかつたのです。

この無理むりもないことを、百姓しやうはあわれとは思おもいませんでした。そして、いままで自分じぶんたちのために働はたらいてくれた牛うしを、大事だいじにしてやろうとは思おもわなかつたのであります。

「こんな役やくにたたないやつは、早く、どこかへやつてしまつて、若いじやうぶな牛うしと換かえよう。」と思おもいました。

秋あきの収しゆう穫かくもすんでしまつと、来年らいねんの春はるまで、地面じめんは、雪ゆきや、霜しものために堅かたく凍こつてしまひますので、牛うしを小舎こやの中なかに入れておいて、休やすましてやらなければなりません。この百姓しやうは、せめて牛うしをそうして、春はるまで休やすませてやろうともせず、
 「冬ふゆの間あいだこんな役やくにたたないやつを、食たべさしておくのはむだな話はなしだ。」といつて、たとえ、ものこそいわないけれど、なんでもよく人間にんげんの感かん情じやうはわかるものを、このおとなしい牛うしをひどいめにあわせたのであります。

ある、うす寒い日のこと、百姓は、話に、馬の市が四里ばかり離れた、小さな町で開かれたというのを聞いたので、喜んで、小舎の中から、年とった牛を引き出して、若い牛と交換してくるために町へと出かけたのでした。

百姓は、自分たちといっしょに苦労をした、この年をとった牛に分かれるのを、格別悲しいとも感じなかったのであるが、牛は、さもこの家から離れてゆくのが悲しそうに見えて、なんとなく、歩く足つきも鈍かったのでありました。

昼過ぎごろ、百姓はその町に着きました。そして、すぐにその市の立っているところへ、牛を引いていきました。すると、そこには、自分の欲しいと思う若い馬や、強そうな牛が幾種類となくたくさんにつながれていました。方々から百姓たちが、ここへ押し寄せてきていました。中には、脊の高いりっぱな馬を買って、喜んで引いてゆく男もありました。彼は、うらやましうに、その男の後ろ姿を見送ったのです。

自分は、馬にしようか、牛にしようかとまどいましたが、しまいには、この連れてきた年とった牛に、あまりたくさんのお金を打たなくて交換できるなら、牛でも、馬でも、どちらでもいいと思つたのでした。

あちらにいたり、こちらにきたりして、自分の氣にいった馬や、牛があると、その値

段^{だん}を百姓^{しやうき}は聞いていました。そして、

「高い^{たか}なあ、とても俺^{おれ}には買^かわれねえ。」と、彼は^{かれ}、頭^{あたま}をかしげていたりしました。

「おまえさん、よくいままで、こんな年^{とし}をとった牛^{うし}を持^もつていなさったものだ。だれも、

こんな牛^{うし}に、いくらおまえさんが金^{かね}をつけたって喜^{よろこ}んで交^{こう}換^{かん}するものはあるめえ。」と、
黄銅^{しんちゆう}のきせるをくわえて、すばすばたばこをすいながら、さげすむようにいった博^{ばく}ろ

労^うもありました。

そんなときは、百姓^{しやう}は、振^ふり向^むいて後^{うし}ろに首^{うなだ}垂^たれている、自^じ分^{ぶん}の牛^{うし}をにくにくしげにに
らみました。

「そんなざまをしているから、俺^{おれ}まで、こうしてばかにされるでねえか。」と、百姓^{しやう}は怒^{おこ}
つていいました。

また、彼は^{かれ}、ほかの場^{ばしよ}所^{しよ}へいつて、一頭^{とう}の若^{わか}い牛^{うし}を指^{ゆび}さしながら、いくらお金^{かね}を自^じ分^{ぶん}
つれてきた牛^{うし}につけたら、換^かえてくれるかと聞^きいていました。

その博^{ばく}労^{ろう}は、もつと、前^{まえ}の男^{おとこ}よりも冷^{れい}淡^{たん}でありました。

「おまえさん、ここにたくさん牛^{うし}もいるけれど、こんなにおいぼれている牛^{うし}はなかうぜ
。」と答^{こた}えたぎりで、てんで取^とり合^あいませんでした。

しかたなく、百姓は、年とつた牛を引きながら、あちらこちらと迷っていました。しいには、もうどんな牛でも、馬でもいいから、この牛と交換したいものだ。自分の牛より、よくない牛や、馬は、一頭だつて、ここにはいないだろうと思つたほど、自分の牛がつまらなく思われたのであります。

日が暮れかかると、いつのまにか、市場に集まつていた百姓たちの影は散つてしまいました。その人たちの中には、持ってきた金より、牛や、馬の値が高いので買わなくて帰つたものもあつたが、たいていは、欲しいと思つた牛や、馬を買つて、引いていったのであります。

独り、この百姓だけは、まだ、まごまごしていました。そして、最後に、もう一人の博労に掛け合つていました。

「俺は、この若い馬が欲しいのだが、この牛に、いくら金を打つたら換えてくれるか？」と、百姓はいいました。

その博労は、百姓よりも年をとっていました。そして、おとなしそうな人でありました。しみじみと、百姓と、うしろに引かれてきた牛とをながめていましたが、「いま換えたのでは、両方で損がゆく。金さえたくさんつけてもらえば、換えないこ

ともないが、この冬、うんとまぐさを食わして休ませておやんなさい。そうすれば、まだ来年も働かされる。だいいち、これまで使つて、この冬にかかつて、知らねえ人の手に渡すのはかわいそうだ。」といいました。やむを得ず、百姓は、また牛を引いて我が家に帰らなければならなかったのです。

「ほんとうに、ばかばかしいことだ。」

百姓は、ぶつぶつ口の中でごごとをいいながら、牛を引いてゆきました。

朝のうちから曇つた、寒い日であつたが、晩方からかけて、雪がちらちらと降りだしました。百姓は、日は暮れかかるし、路は遠いのに、雪が降つては、歩けなくなつてしまふ心配から、氣持ちがいらいらしていました。

「さあ早く歩け、この役たはずめが！」とどなつて、牛のしりを綱の端で、ピシリピシリとなぐりました。牛はいつしようけんめいに精を出して歩いているのですけれど、そう早くは歩けませんでした。雪はますます降つてきました。そして、道の上がもうわからなくなつてしまい、一方には日がまったく暮れてしまったのであります。

「こんなばかなめを見るくらいなら、こんな日に出てくるのでなかった。」と、百姓は、氣持ちが急ぐにつけて、罪もない牛をしかつたり、綱で打つたりしたのであります。

この町から、自分の村へゆく道は、たびたび歩いた道であつて、よくわかつているはずでありましたが、雪が降ると、まったく、あたりの景色は変わってしまった。どこが、田やら、圃やら、見当がつかなくなりました。そして、暗くなると、もう一足も歩けなかつたのです。

百姓は、こうなると、牛をしかる元氣も出なくなりました。たとえ、いくら牛をしかつてもなぐつても、どうすることもできなかつたからであります。

「さ、困つてしまった。」といつて、ぼんやり手綱を握つたまま、百姓は道の上にたたずんでいました。いまごろ、だれもこの道を通るものはありませんでした。

天氣が悪くなると、帰る人たちは急いで、とつくに歸つてしまいました。また、朝のうちから天氣の変わりそうなのを氣遣つて、出る人も見合わせていたので、日の暮れた原中では、一人の影も見えなかつたのであります。

百姓は腹がすいてくるし、体は寒くなつて、目をいくら大きく開けても、だんだんあたりは暗く、見えなくなつてくるばかりでした。

彼は、どうなるかと思ひました。道を迷つて、小川の中にでも落ち込んだなら、牛といつしよに凍え死んでしまわなければならぬと思ひました。

百姓は、まったく泣きたくなくなりました。ことに、

「ほんとうに、今日こなければよかった。来年の春まで、この牛を飼っておくことに、最初からきめてしまえばよかった。あの年とつた博勞のいったのはほんとうのことだ。いま、この寒さに向かつて、他人の手に渡すのはかわいそうだ。」

こう思うと、百姓は、振り向いて、後ろから黙つてついてくる黒い牛を見て、かわいそうに思いました。牛の脊中にも、冷たい白い雪がかかつていました。

「来年の春までは置いてやるぞ。だが、今夜この野原でふたりが凍え死にをしてしまえば、それまでだ。俺は、もう、もう一足も歩けない。おまえは道がわかつているのか？

たびたびこの道を通つたこともあるから、もしおまえにわかつたなら、どうか俺を乗せて、家までつれていってくれないか？」

百姓は、牛に頼みました。

彼は、最後に牛の助けを借りるよりほかに、どうすることもできなかつたのであります。

牛は、百姓を乗せて、暗い道をはうように雪の降る中を歩いていきました。夜が更けて

から、牛は、我が家の門口にきて止まりました。百姓は、はじめて生きた心地がして、明るい暖かな家の内に入ることができたのでした。

百姓は、その晩、牛にはいつもよりかたくさんにまぐさをやりました。自分も酒を飲んで、床の中に入って眠りました。

明くる日になると、もう、百姓は、昨夜の苦しかったことなどは忘れてしまいました。そして、これからもあることだが、ああして道に迷ったときは、なまなか自分で手綱を引かずに、牛や馬の脊にまたがって、つれてきてもらうのがなによりりこうなやり方だと思いました。

彼は、あのととき、心で牛に誓ったことも、忘れてしまいました。そして、どうかして、早く年若い牛を手に入れたいと思っていました。

ちようどその時分、同じ村に住んでいる百姓で、牛をいい値で売ったという話をききました。町へどんどん牛が送られるので、町へきている博労が、いい値で手当たりしだいに買っているという話を聞いたのであります。

彼は、さっそく、その百姓のところへ出かけていきました。

「おまえさんの家の牛は、いくらで売れたか。」とききました。すると、その百姓は、「なんでも、大きな牛ほど値になるようだから、おまえさんの家の牛は年をとっているが、体が大きいからいい値になるだろう。」といいました。

彼は、もし自分の牛が売られていたら、どうなるだろうという牛の運命などは考えませんでした。ただ、思っているよりはいい値になりさえすれば、いまのうちに牛を売ってしまつて、金にしておくほうがいいと思ひました。そして、来年の春になったら、若い、いい牛を買えば自分もつとしあわせになると思ひました。

さつそく、彼は、町へ牛を引いていつて売ることになりました。

こうして百姓は、ふたたびぬかるみの道を牛を引いて、町の方へといったのです。おそらく、今度ばかりは、ふたたび、牛はこの家に帰つてくるとは思われませんでした。

百姓は、道を歩きながら、「あの家の牛でさえ、それほどに売れたのだから、あの牛よりはつと大きい俺の牛は、もつといい値で売れるだろう。」と考えていました。

そのとき、牛は、何事も知らぬふうに、ただ黙つて、百姓の後ろから、ついて歩いていきました。

町へ着きました。そして、百姓は、博労にあつて、自分の牛を売りました。ほんとうに、彼が思つたよりは、もつといい値で売れたのであります。百姓は、金を受け取ると、長年苦勞を一つにしてきた牛が、さびしように後に残されているのを見向きもせず、さつさと出ていってしまいました。

「大もうけをしたぞ。」と、彼は、こおどりをしました。

百姓は、これが牛と一生のお別れであることも忘れてしまつて、なにか子供らに土産を買つていつてやろうと思ひました。それで、小間物屋に入つて、らつぱに、笛にお馬に、太鼓を買ひました。二人の子供らに、二つずつ分けてやろうと思つたのであえいます。

この日も、また寒い日でありました。百姓は、たびたび入つた居酒屋の前を通りかかると、つい金を持つていたので、一杯やろうという氣持ちになりました。

彼は、居酒屋ののれんをくぐつて、ベンチに腰をかけました。そして、そこにきあわしている人たちを相手にしながら酒を飲みました。しまいには、舌が自由にまわらないほど、酔つてしまいました。

戸の外を寒い風が吹いていました。いつのまにか日は暮れてしまつたのであります。

「今日は、牛を引いていないから世話がない。俺一人だから、のろのろ歩く必要はない。いくらでも早く歩いてみせる。三里や四里の道は、一走り走つてみせる。」と、自分で元氣をつけては、早く帰らなければならぬことも忘れて、酒を飲んでいました。

彼は、燈火がついたのでびつくりしました。しかし酔つていたので、あくまでおちついて、すこしもあわてませんでした。

やつと、彼は、その居酒屋から外に出ました。ふらふらと歩いて、町を出はずれてから、さみしい田舎道の方へと歩いていきました。

牛を売ってしまつて、百姓は、まったく身軽でありました。しかし、いままでは、たとえ彼が道でないところをいこうとしても、牛は怪しんで、立ち止まったまま歩きませんでした。いまは、彼が道を迷つても、それを教えてくれるものはなかったのであります。

百姓は、あちらへふらふら、こちらへふらふらと歩いているうちに、ちがった道の方へいつてしまいました。そのうちに、一本の大きな木の根もとにつまずきました。

「やあ、なんだい？」といつて、百姓はほおかぶりをした顔で仰ぎますと、大きな黒い木が星晴れのした空に突つ立っていました。懷に入っている財布や、腰につけている子供らへの土産を落としてはならないと、酔つていながら、彼は幾たびも心の中で思いました。そして、たしかに落とした氣遣いはないと思うと、安心して、そのまま木の根に腰をかけてしまいました。

彼は、ほんとうにいい気持ちでありました。

ほおを吹く風も、寒くはなかったのであります。あたりを見まわすと、いつのまにか、晩春になつていました。

まだ、野原には咲き残った花もあるけれど、一面にこの世の中は緑の色に包まれている。田の中では、かえるの聲が夢のようにきこえて、圃はすっかり耕されてしまい、麦はぐんぐん伸びていました。

彼は、このごろ手に入れた若い牛のことを考えながら、土手によりかかって空をながめていきますと、野のはての方から、大きな月が上がりかけました。空は、よく晴れていて、月はまんまるくて、昼間のように、あたりを照らしています。

「まあ、あんなに若い、いい牛は、この村でも持っているものはたくさんない。みんな俺の牛を見ては、うらやまないものは一人もない……。」「と、彼は、いい機嫌で独り言をしいました。

すると、たちまち、あちらの方から太鼓の音がきこえ、笛の音がして、なんだか、一時ににぎやかになりました。

「不思議だ、もう日が暮れたのに、なにがあるのだろうか？」と、彼は思つて、その方を見守っていました。

村じゅうの人が総出で、なにかはやしたてています。そのうち、こちらへ黒いものが、あちらの森の中から逃げるようにやってきました。見ると、自分の家の牛であります。牛

は、いつのまに小舎こやの中なかから森もりに出たものか、その脊中せなかには二人ふたりの子供たちこどもが乗つて、ひとり人は太鼓たいこをたたき、一人は笛ふえを吹いていました。

「いつのまに、子供たちこどもは、あんなに上手じょうずになつたろう？」と、彼は感心かんしんして、耳みみを傾かたむけました。

「きつと、子供こどもらは、俺おれを探さがしにやつてきたのだろう。いまじきに俺おれを見つけるにちがいない。そして、ここへきて、俺おれの前まえで、太鼓たいこを打ち、笛ふえを吹いてみせるにちがいない。俺おれは、子供こどもらが見つくるまで、黙だまつて眠ねむつたふりをしていよう……。」と思おもいました。

太鼓たいこをたたいたり、笛ふえを吹いたりしている、二人ふたりの子供たちこどもの姿すがたは、月つきがいいので、はつきりとわかりました。

やがて、牛うしは、彼かれのいる前まえへやつてきました。子供たちこどもが、自分じぶんを見つけて、いまにも飛び降りとるだろうと思おもっていましたのに、牛うしは子供たちこどもを乗のせたまま、さっさと自分じぶんの前まえを通りとおりすぎて、あちらへいつてしまいました。

遠くとおに、池いけが見みえていました。池いけの水みづは、なみなみとしていて、その上うへに、月つきの光ひかりが明るく輝かがやいていました。若い牛わかうしは、ずんずん、その方ほうに向むかつて歩あるいてゆきました。

彼は、驚おどろいて起きお上がりありました。なに用ようがあつて、子供たちこどもは、池いけの方ほうに歩あるいて行くの

か？ 自分はここににいるのに！

「おうい、おうい。」

彼は、牛を呼び止めようとしました。しかし、二人の子供たちが笛を吹いたり、太鼓をたたいたりしているのです、彼の呼び声は、子供たちにはわからなかったのです。

百姓がこのごろ手に入れたばかりの、若い黒い牛は、水を臆せずにずんずんと池の中に向かつて走るように歩いていきました。

このとき、百姓は、後悔しました。これが前の年とつた牛であつたら、こんな乱暴はしなかつたろう。そして、自分がこんなに心配することはなかつたろう。あの年とつた牛は、一度、暗い雪の降る夜、自分を助けたことがあつた——あの牛なら、子供を乗せておいても安心されていたのに——と思ひながら。彼は、大いに氣をもんでいました。彼は、もはや、じつとして見ていることができずに、その後を追っていきました。すると、すでに、牛は、自分の子供を乗せたまま池の中へどんどんと入っていきました。

「どうする気だろう。」

百姓は、たまげてしまって、さつそく裸になりました。そして、自分も池のふちまで走っていったときは、もうどこにも牛の影は見えなかつたのであります。

彼は、のどが渴いて、しかたがありませんでした。草を分けて池の水を手にくつつて、幾たびとなく飲みました。

このとき、太鼓の音と、笛の音は、遠く、池を越して、あちらの月の下の白いもやの中から聞こえてきました。

あの牛は、どうして水音もたてずに、この池を泳いでいったらう？ 百姓は、とにかく子供たちが無事なので、安心しました。

彼は、また、そこにうずくまりました。すると、心地よい春の風は、顔に当たって、月の光が、ますますあたりを明るく照らしたのであります。

やっと夜が明けました。百姓は驚きました。小さな、川の中に体が半分落ちて、自分らは道でもないところに倒れていたからです。帯は解けて、財布はどこへかなくなり、子供たちの土産に買ってきた笛や太鼓は、田の中に埋まっていました。

少々隔たったところには、高い大きな松の木がありました。木の上の冬空は、雲ゆきが早くて、じつと下界を見おろしていました。百姓の家は、ここからまだ遠かったです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「女性日本人 ㊦巻1号」

1923（大正12）年1月

※表題は底本では、「百一姓《しょう》の夢《ゆめ》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

百姓の夢

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>